佐々木 修

作品アルバム

はじめに

「今度は少し本格的な画集を　作ってみませんか」と友人の藤井醇さんに　声をかけて頂いたのは　昨年の（2011年）暮れの事である

一昨年長野市で開いた展覧会の際　作って頂いた和紙の画集が気に入っていた私は　気のない返事をしたように思う
「こんな感じになるんですよ！」と見せられたテスト刷り発色の良さに思わず「是非やりましょう!」と返事をしていた

年が明けて　早速　制作の準備が始まった 先ずは絵をお持ち頂いている方を訪ねる所から始まった
信州　関東と　2度に亘り　写真家でもある藤井氏に御同行頂いた

東北　北海道へは　スケッチを兼ねての旅になり長丁場が予想される為　僕自身が撮影機材を持って訪ねた絵との再会は　里子に出した子供と会うようで　制作当時の事がよみがえり　新鮮な気持ちになりました

今回お訪ねした皆様方が　心から絵を愛しておられた事　面倒な作品撮影に　気持ちよく協力してくださった事に　深く深く感謝致しております

そして　撮影した作品一点一点の色彩の調整を　共同作業で進めながら　画集全体の構想、レイアウトなど頭の中もいっぱい　こんな状態が２～３ヶ月に及び
大変な事も多々あったが　楽しく、素敵な時間を作って頂いた藤井醇さん、昭子夫人　お二人に　この紙面を借りて　心から御礼申し上げます

絵筆を持った事のない自分が突然絵を描きだし　始まった画業は　やっと14年を迎えたところです
なるべく初期の作品から　現在までの作品を　載せるよう心がけました

最後に　画集の構成、編集を進めていく中で、割愛せざるを得ない作品が、少なからず生じました
撮影にご協力頂きながら　掲載できなかった方 また伺えなかった方には　心からお詫び申し上げます

佐々木　修

北アルプス

トンネルを抜けると

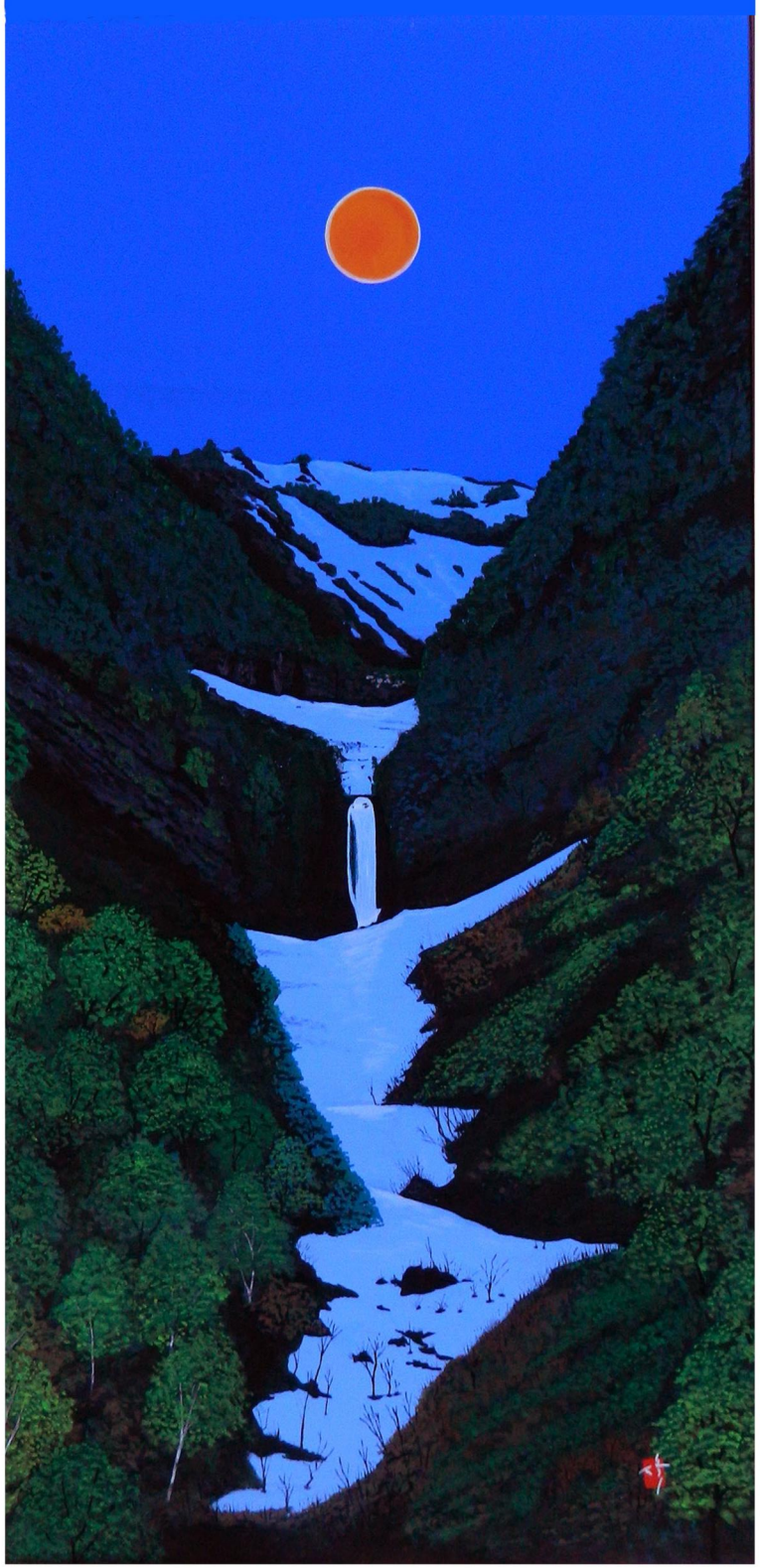
鳥海山

月山を望む

残雪の滝

その年　奥只見から始まった
東北の旅も　鳥海　八甲田
八幡平と　三週間ほどが過ぎ
尾瀬の燧ケ岳を登って　帰路
についた
往きには通れなかった　国道
３５２号線も　開通しており
のんびりと　雪の谷など　眺
めながら新潟を抜けて　信州
まで戻ってきた
そんな時　いろいろな風景と
の　出会いがあった

只見



奥只見丸山

月の夜には

恵　み

豪雪によって　厳しい生活を余儀なく
させられているのは　人間だけでは
ないようである
その土地に　生きる鳥や動物　木々も
その例外ではなく　油脂分を貯えて
冬を凌ぐ
そして　豪雪がもたらす水を得て　山
菜や　木の芽　豊かな森を育てる
厳しくはあるが　これは　恵みであり
豊かさなのだと思う

奥只見

佐武流山

苗場山遠望

心地よい疲れ

ガイドの友人に　助手を頼まれた　といっても　ポーター兼キッチンボーイである　お客の食料を背負って　群馬の野反湖から越後湯沢まで　山を六つほど縦走していく　途中　二晩程幕営すことになるのだが　道は無いため
積雪期の山行だった
適当な場所を見つけては　テントを張る　設営後は　客の食事作り　そして翌日の行動用の水と　バーナー４台がフル稼働である
準備は忙しいが　雪の中で　濡れた足が冷たい
食後は寒さ凌ぎに　焚き火をした 火に魅入られて　一日の疲れを忘れさせる心安らぐ　ひと時であった

誰もいない山の上で　満天の星が　静かに　輝いていた

白砂山

神楽　三俣

山稜の星

鳥海の月

鳥海山の御浜からは　日本海へ
向って　一気に滑り降りた　車
まで戻り　スキーを外している
と　声をかけられた
よく見ると　酒田の友人だった
前日　月山から移動の際に　連
絡したのだが　わざわざ　山ま
で探しに来てくれていた
その日は　彼と　彼のスキー仲
間に　招待され　日本海の美味
しい魚と　お酒を頂いた
翌日は　ガイドでもある　彼に
案内され　もう一度　鳥海山を
登った

こんな素敵な友人が　いる事に
心から感謝している

御浜

神聖なる時間

真狩村

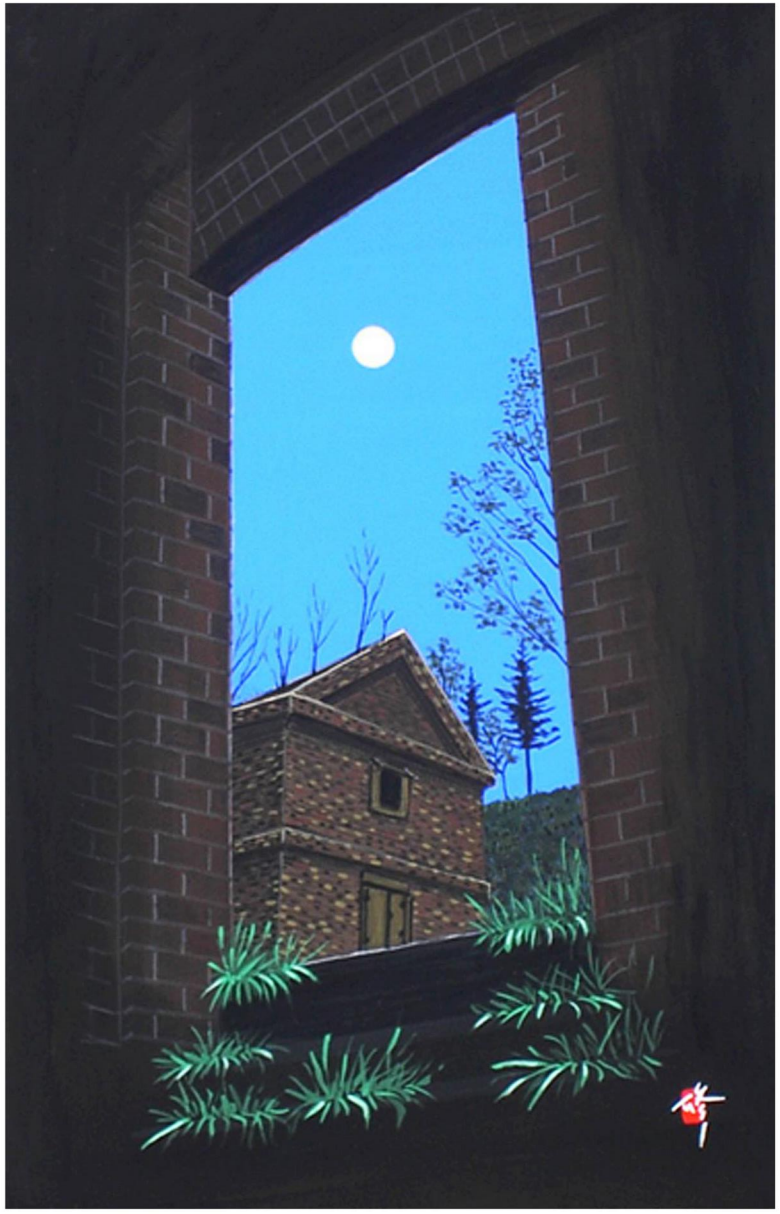
春の羊蹄山を訪ねた　山頂は前日の新雪と　霧氷が美しい
噴火口は　立派なもので　標高は半分ほどだが　富士山を彷彿させる
横にはニセコ連山　洞爺湖は　足元に見える
暖かい陽差しの中　足下に心地よいザラメ雪を感じながら　すっきりとした
急斜面を　緑色の春へと　一気に滑り降りる
至福の時である

栄枯盛衰

「つわも共が夢の跡」
僕が生まれる　遥か昔栄え
た小樽の街は　そんな跡が
そこかしこに残っている
小高い山が　お宮になって
いたり　その下の　レンガ
作りの廃屋を　港とともに
眺めていると　その隆盛が
聞こえてくる様だ

昔の栄華が　偲ばれる

小樽



南幌

家 路

春 爛 漫

札幌での展覧会にむけて　春の
北海道へスケッチに出掛けた
通称「赤レンガ」は北海道庁の
ことで　地元で知らない人は
いない
私が訪ねた折には　たった一人
の見学者にも　かかわらず親切
に　案内してくれた
そして　色々と北海道の　歴史
を　説明して頂いた　札幌で育
った私だが　土地の事を　殆ど
知らないことに気づいた
また　訪ねる機会を　得たなら
もう一度　勉強させてもらいた
い　気分である

札幌

大雪山　旭岳

雪山巡礼

星の稜線

十代の夏　上司に誘われて　大雪山を縦走した
中学山岳部以来　数年振りの山行だった　旭岳まで来た時　頂上の斜面を　10人程のグループが　夏スキーに興じていた
汗だくの私には　その涼しげな姿が目に焼きついた　とても　うらやましかった事を　覚えている

その30年後　再び　旭岳を訪れた
頂上は春の新雪で　今回は気持ち良くスキーで下った
30年来の夢が叶ったようで　気持ちの良い山行であった

大雪山

美瑛岳

山上の楽園

十勝岳

富良野岳遠望

月出ずる

笹の小径を歩くのが好きだ　12才の時　初めて登った札幌近郊の空沼岳に始まり
いろいろな笹の山を歩いてきた　美ヶ原への登りも　そんな径だった
三城牧場上の　広小場キャンプ場から登るのだが　マイナールートという事もあり　車で上がれるせいか　この百名山は誰にも会わない美しい笹の径だった

美ヶ原

祭りへの道

八海山神社の火祭りは　今では
新潟だけでなく　群馬からも TV
中継されるほど　有名な祭りであ
る
以前は　この街中にある 大前(オオサキ)神
社で　行われていた
この日　（前夜祭）は社務所から
街中を 抜けてお宮まで　百匁ろ
うそくの　灯りが　静かに 輝いて
いた

誰に 出会う事もなく　とても幽幻
な世界であった

南魚沼市

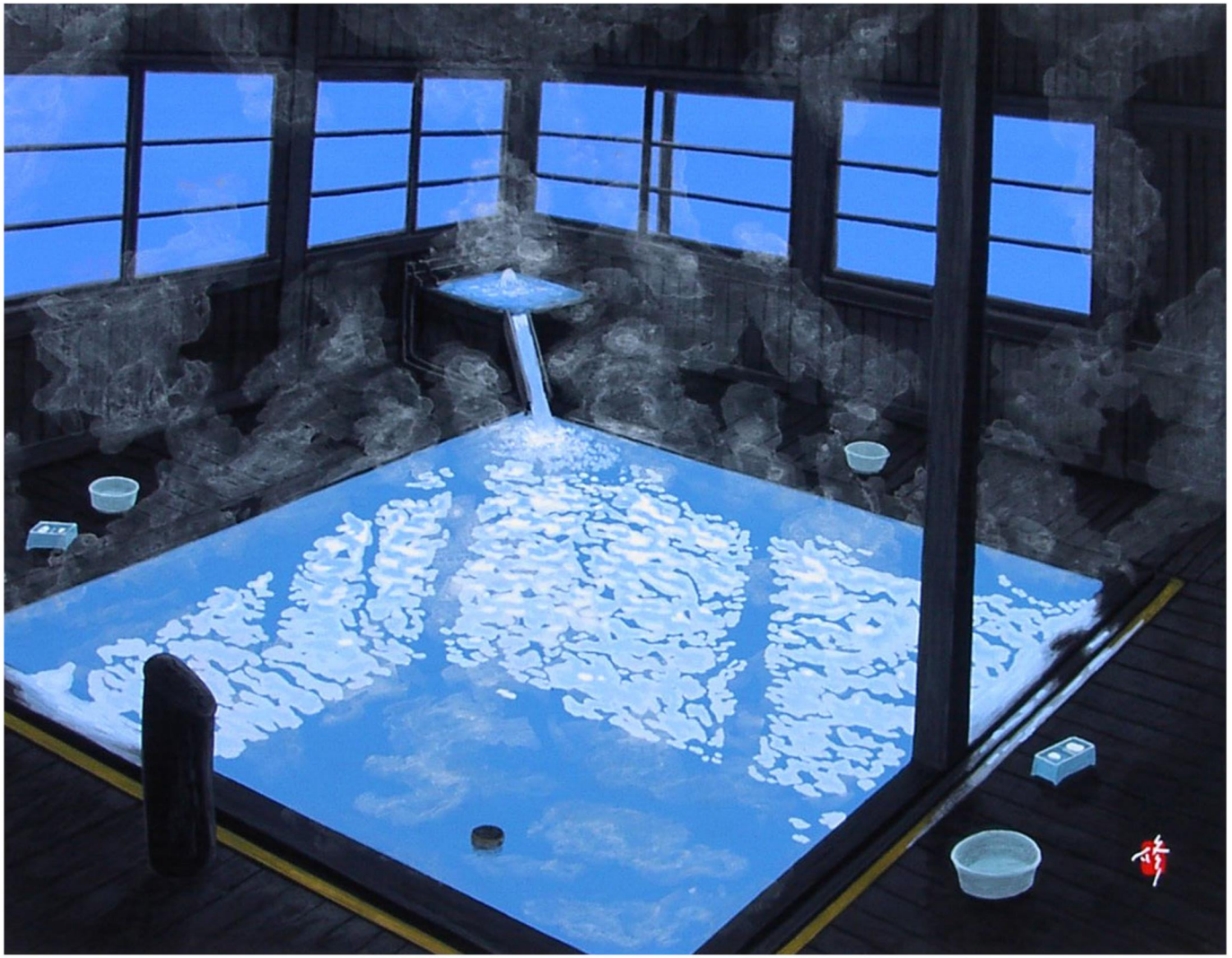
奈良　薬師寺

春の宵

春の宵

京都へは　友人の引越しで行った
荷を降ろした後は　友人が　京都
の街を　案内してくれた
丁度　桜の季節で　八坂神社　丸
山の枝垂桜など　ライトアップさ
れて　とても　きれいだった
三十年ぶりの南禅寺は　翌日訪ね
た
ここも満開の桜だった
花頭窓は　禅宗のお寺　というこ
とを　初めて知った
些細な事ではあるが　絵を描く事
で　いろいろと　学ばされる　日
々である

京都　南禅寺



八幡平　藤七温泉

湯けむり

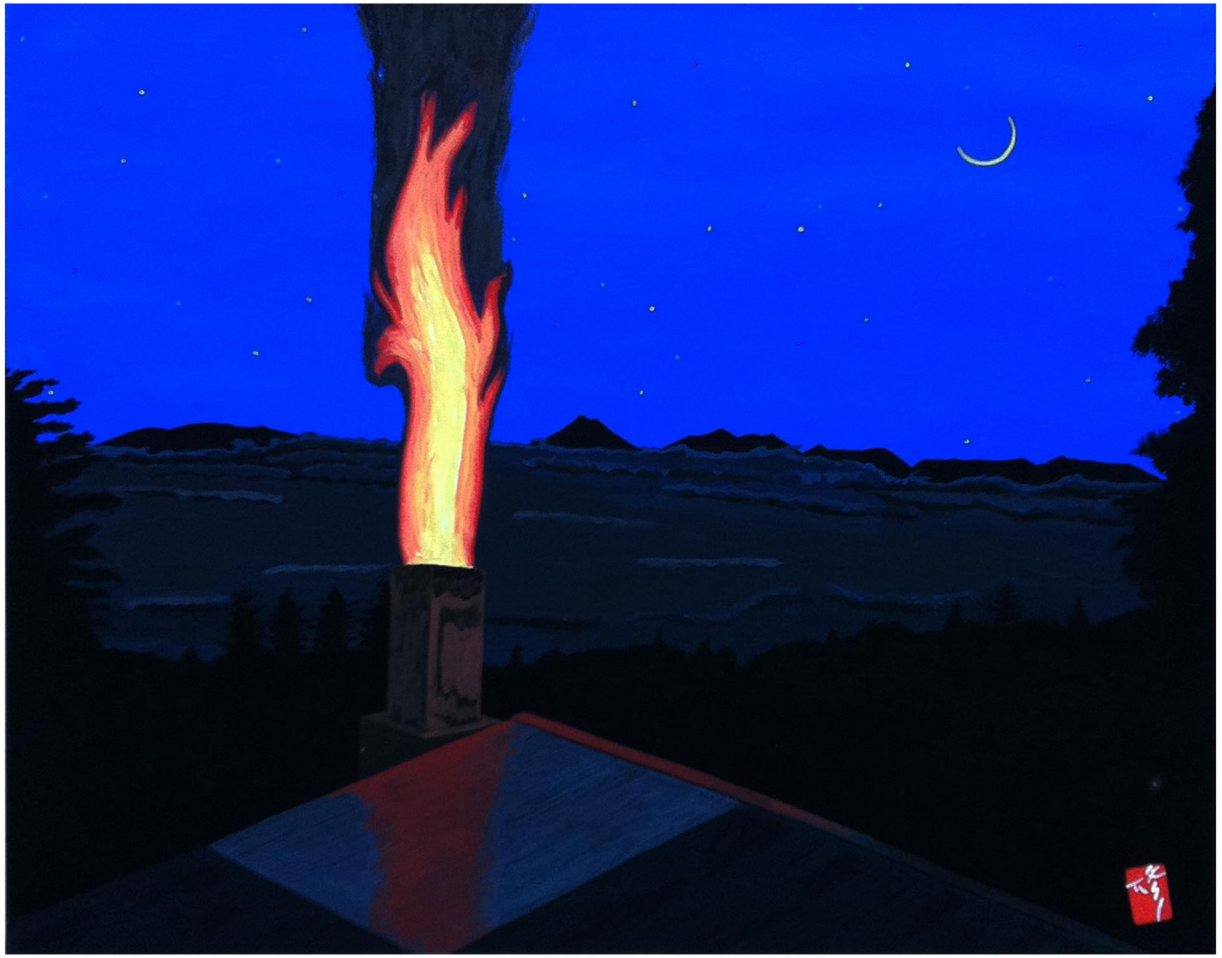
湯けむり

信州　松本は温泉に恵まれた街である
扉　美ヶ原　崖の湯など　なかでも浅
間温泉は　古い歴史がる
あまり　人目には触れないが　静かな
共同浴場が　いくつも点在する

「北せんきの湯」もそのひとつである
低料金で利用させて頂ける共同浴場は
ありがたい限りである
しかし　先日　一番気に入っていた
「倉下の湯」が　廃業となった

風情ある　昔ながらの湯治場の灯りが
消える事は　とても寂しい事である

松本 浅間温泉



松本　鉢伏窯

窯焚き

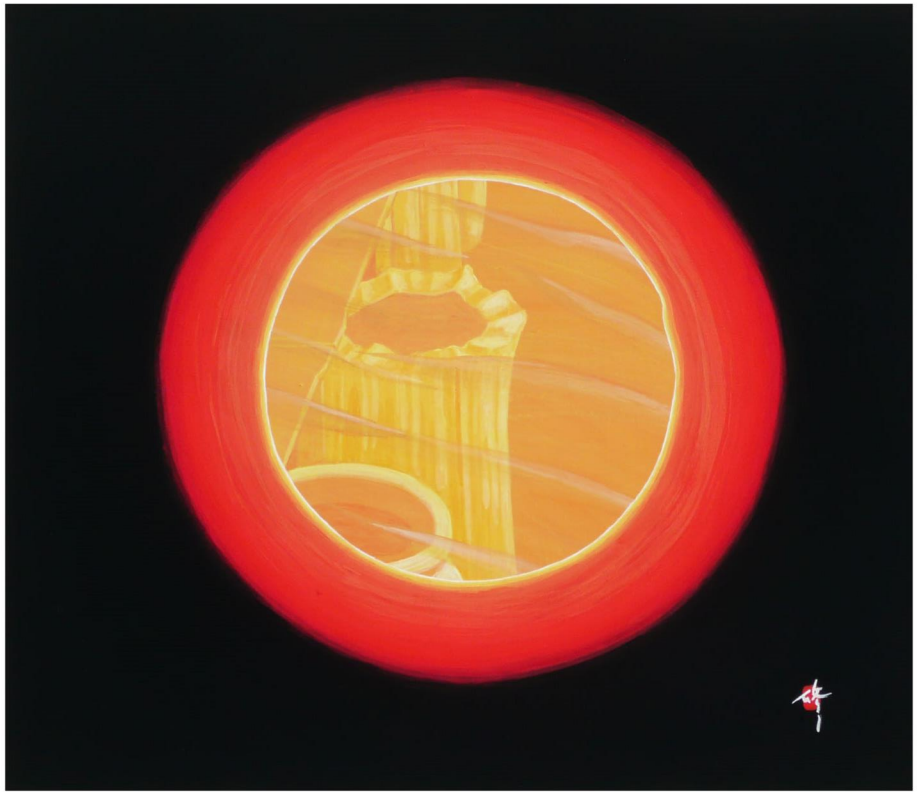
焼　成

1300℃の炎が　ゆらゆらと焼き物の間を
抜けてゆく　幻想的な世界
友人の窯を手伝って　25年を越える
先頃　彼と話していて　解ったのだが
通算すると　１年間は窯を　焚いている
ことに気付いた
１週間焚く窯焚きは　決して楽ではない
長い時には　12日間に及んだ

何故　今まで　続いたのか？

友人という事もあるが　出会う事がなけ
れば　一生見ることがない　このハード
で妖艶な　炎の世界に　魅入られている
のかも知れない

松本　鉢伏窯



グランドキャニオン

夜 明 け 前

グランドキャニオンには夕刻到着した　ＬＡを出てから幾つの地平線を越えただろう
800ｋの距離は少しづつ標高を上げ2000ｍを　だいぶ越えているのだが　全くそれを感じさせない
ただ大地が　突然無くなるのである
そして足元から1600ｍ落ちるその光景は　黄昏ということもあり　奈落の底を思わせた
翌朝暗い中　所々にある頂だけが　深紅に染まる様は　現実離れをして今でも忘れられない

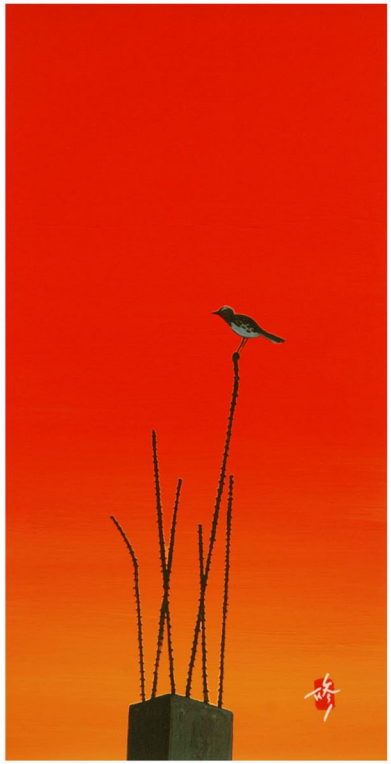
晩秋のオベリスク

久々の上京　都会でまず目につくのは
造形美である ビル ドーム タワー 等
沢山の建造物が　私を圧倒する
普段　山の方ばかり向いているのだが
ビルの谷間に　突然現れる　都の華は
私を　楽しませてくれる

細やかなことではあるが　このチョットし
た出会いが　旅の醍醐味だと思う

山で出会う　可憐な高山植物も　都会
で出会う　巨大な建造物も　そして我
家の周りに広がる 稲穂たちも　いつも
私を 新鮮な気持ちにしてくれる
そんな　ささやかな出会いを　心秘か
に楽しんでいる

東京　新宿



タメル

カトマンズの朝

シャンボチェ

稜線のタムセルク

夜の寺院

カトマンズの事を　おもちゃ箱をひっくり返したような街　という表現があるが　これは　ボダナート寺院　を訪ねた方ではないかと　勝手に想像している
聖なる寺院を　そのように思うのは　不謹慎極まりないが　正直なところでもある
ネパール最大のストゥーパ（仏塔）は　廻りを直径１００ｍの回廊が　めぐり　その周りを　ビルが丸くとりまく　そして　その回廊には　いつも数百　数千の敬虔な仏教徒が　右回りに　廻っている
ある人はマニ車（経文の入った仏具）を　まわしある人は五体倒地で
そして　ロサール（正月の祭り）には　百万個のバターランプが　献灯されるという　遠くからも人が集まる　盛大な祭りに　部外者は　控えたいところだが　満月の夜に　数万のバターランプに照らし出された　寺院を
いつの日にか　そっと　訪ねてみたいと　思っている

ボダナート寺院

ゴーキョ

厳冬のヒマラヤ

マッチェルモ

稜線のゲストハウス

ジョムソム街道

峠に生きる

サンクチュアリの朝

高山病の為　殆ど一睡も出来ず
眠い目を擦りながら　少し上の
アンナプルナ氷河へ　行ってみ
た
陽が昇ってきている様でアンナ
プルナ本峰（8091m）の上部が
深紅に染まってきた
南壁　ファング　アンナプルナ
サウスと　次々と赤く染まって
いく
聖域という言葉を少しだけ理解
した気分である　頭が痛いのも
喉が渇くのも　忘れるひと時で
あった
全てが初めて見る色だった

アンナプルナベースキャンプ

頂上の月

ヒキーデ

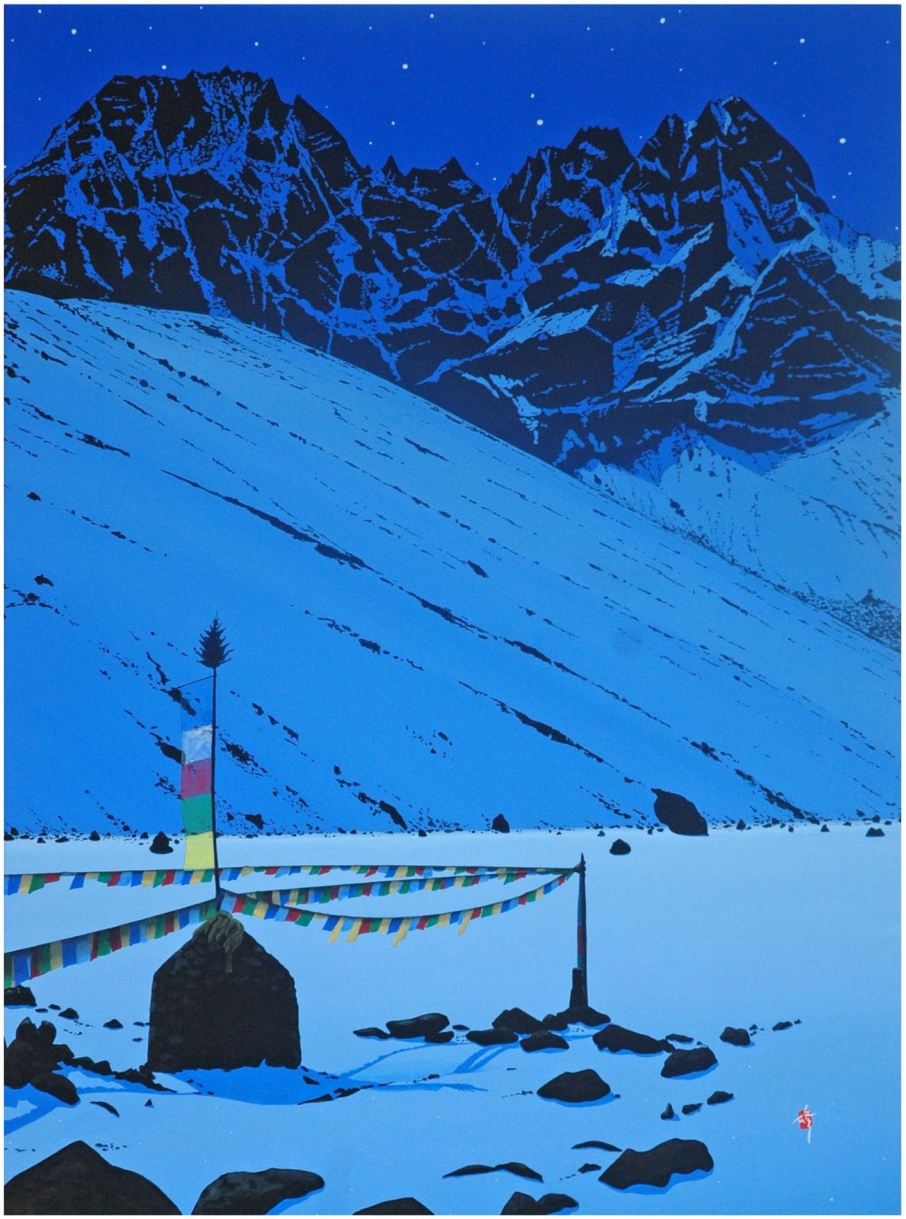
ドゥード ポカリ の 夜

長い夜　灯りのない　真っ暗な部屋で過ごす日々が　半月ほども続いている
なかなか　寝付けないので　トイレのついでに　外に出て見た

昨日の雪を　ふんわりと　デコレーションした　氷河湖は　降るような星に照らされ　幻想的な　美しさである　そんな景色を眺めていると
「ああ今ヒマラヤにいるのだぁ！」
などと　感慨にふけるのだが寒さで思わず我に返る

「明日はあの峰に登るのだ！」と奮起して　部屋に戻る　冷え切った体で　寝袋にもぐり込んだ

ゴーキョ



ターメ

ゲストハウスの夜

路地裏の神様

居酒屋の帰り　近道の路地へ
入ると　道の奥で何やら　蠢
いている

牛がゴミを漁っているのだ！

宗教が生きているこの国では
毎朝の供物は　かかさないの
だが　神様とはいえ　ノラ牛
生活は大変なようで　ときに
は　ビニール袋などを　食べ
てしまい　苦しんでいる姿を
見かける事もあった

カトマンズ

エベレスト街道

夜想曲

夜の寺院

冬のカトマンズ　スワヤンブナート
寺院が　朝霧の上に　そびえている
その寺院から　3キロ離れた　私の
宿泊している　ホテルのペントハウ
スまで　霧の上を滑るように　朝の
読経が聞こえてくる
ネパールの冬は　乾期の為　雨が殆
ど降らない
朝と夕に出るこの霧が　街を浄化し
ているようだ　そしてこの読経が
人々の心を　清めているのだと思う

天から降ってくる様に　聞こえる
読経は　私が異国の地に　いること
を実感させてくれた

ネパール

ポ カ ラ

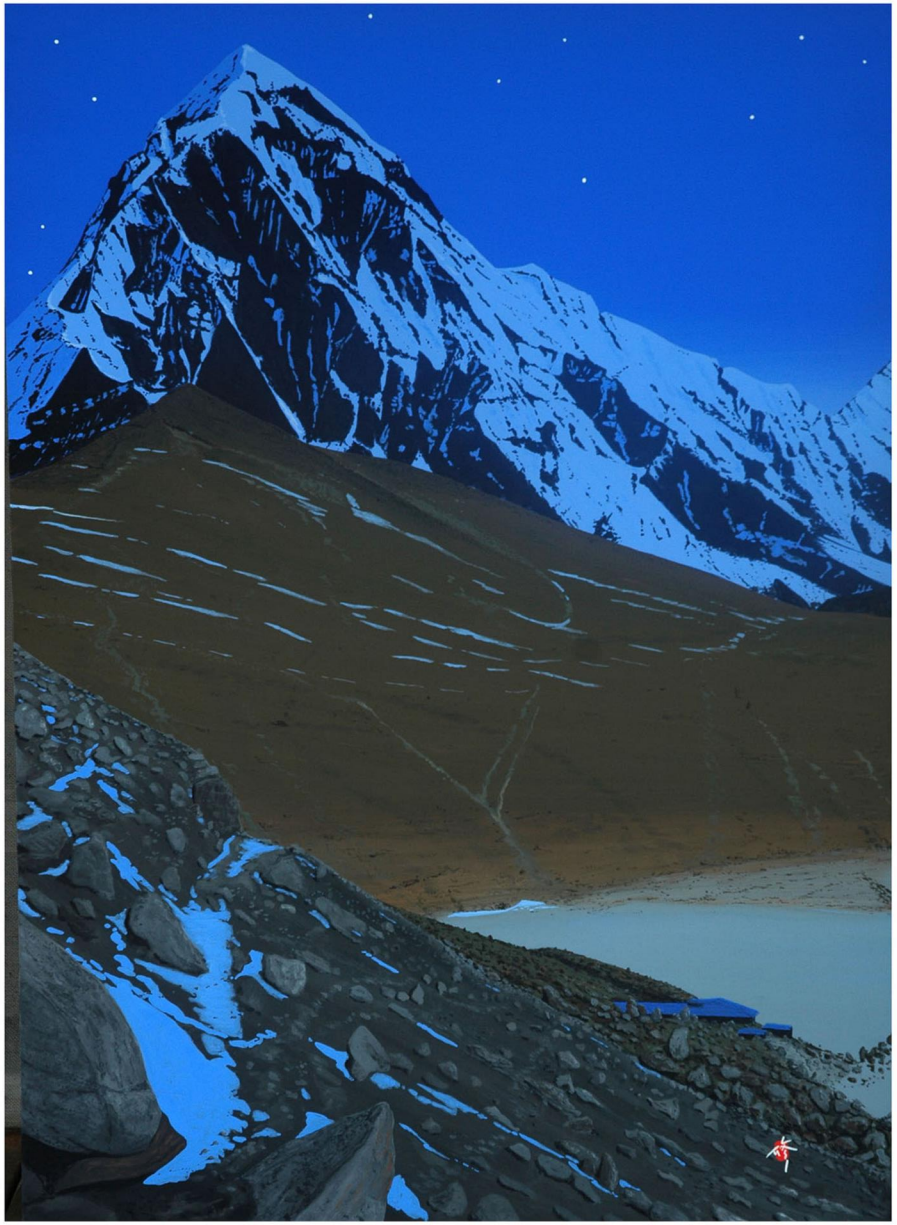
旅 立 ち の 朝

プモリを望む

年間山に登る回数は少ない
足掛けである　しかし40年
ほどは　山に登ってきた
恥ずかしい話であるが　カ
ラパタール（5545m）へ登
った時 生まれて初めて と
めどなく 涙が あふれ出て
しまった
今でも その時のことを 思
うと 目頭が熱くなる

そして 今でも その光景を
絵に 出来ずにいる

ゴラクシェプ



松本　奈川

春の兆し

十石山

穂高岳遠望

厳 冬

友人に誘われて　正月を
嘉門治小屋で　迎える事
になった
大晦日　釜トンネルから
は　スキーでのハイキン
グである
大正池での昼食は　多少
吹雪かれたが　帝国ホテ
ルを　過ぎたあたりから
徐々に陽差しが　明るく
なる
振り返ると　焼岳の山容
が　覆いかぶさるように
立派に見えた

上高地

乗鞍岳

位 ケ 原

シュプール

スキーは　絵を描く　ずっと以前
からやっている　滑る事は　勿論
楽しいが　山ですばらしい景色に
出会えることが　嬉しい
そんな出会いが　絵を描く　原動
力にもなっている

少しキザであるが　気持ちのよい
陽差しの中　誰も踏んでいない新
雪に　シュプールを刻む事も　絵
を描いている気分なのである

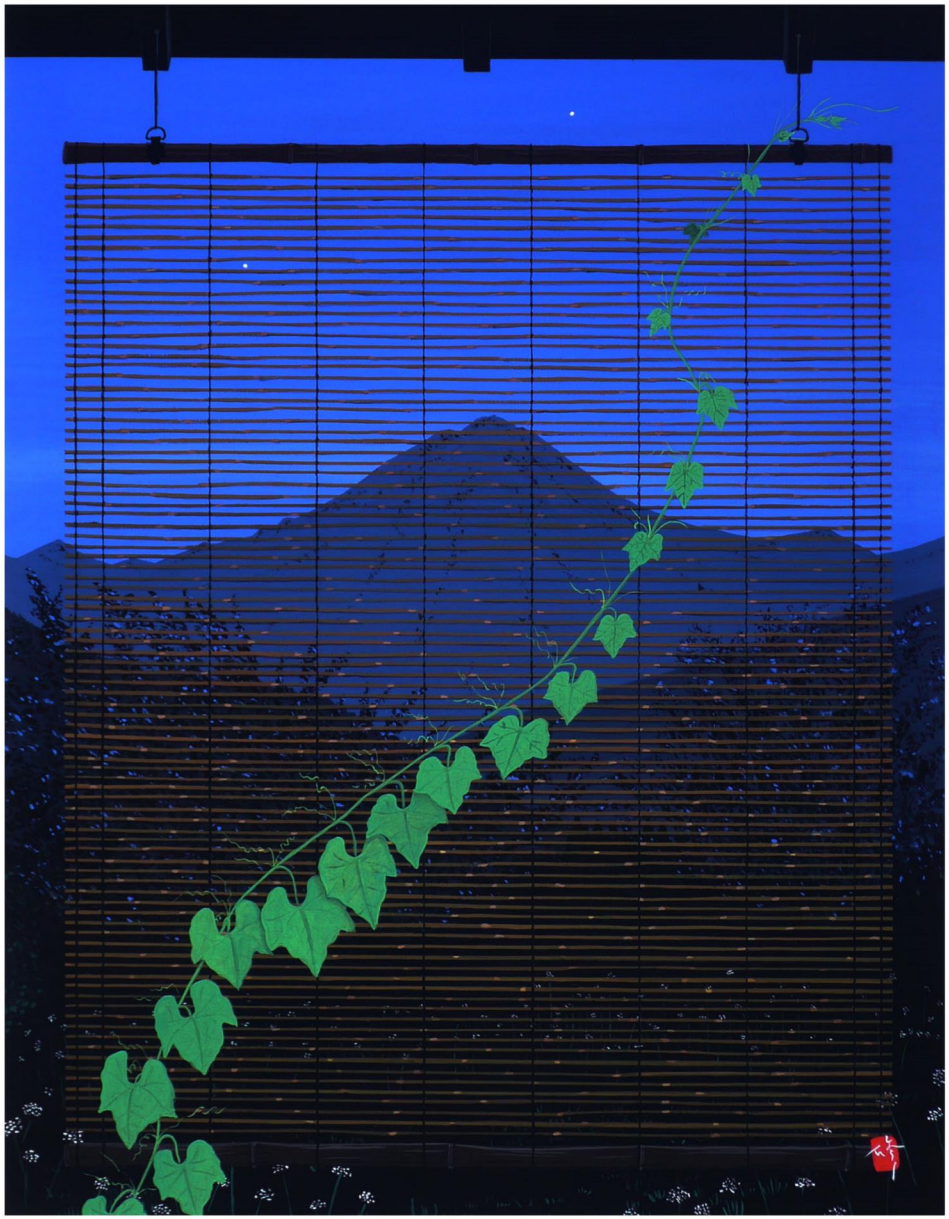
岩岳

松本　奈川

御嶽山遠望

松本　奈川

乗鞍岳遠望



あずみ野

夜明けの散歩

秋の夜長

いったい何処を見つめているのだろう！
壁であったり 山であったり 時には　消えているストーブであったり
いつもちゃんと座り哲学者のような顔をして　物思いに耽っている
そんな うちの娘も今年 二十歳を迎えた
足腰はだいぶ弱くなったが　今でもたまに　私のフトンに入ってくる　そして私を寝かしつけるとそーっと出て行く
サービス精神なのだろうか？

あずみ野

あずみ野

アーベントロート

紫陽花の夜

我家の庭に　立派な紫陽花が
咲く　私の事である　別段な
にも　手入れをしているわけ
ではないが　毎年　美しい花
を　咲かせてくれる

そして　僅かではあるが　傾
斜がもたらす　豊科　松本の
夜景と相まって　美しく季節
を　彩ってくれる

あずみ野

あずみ野

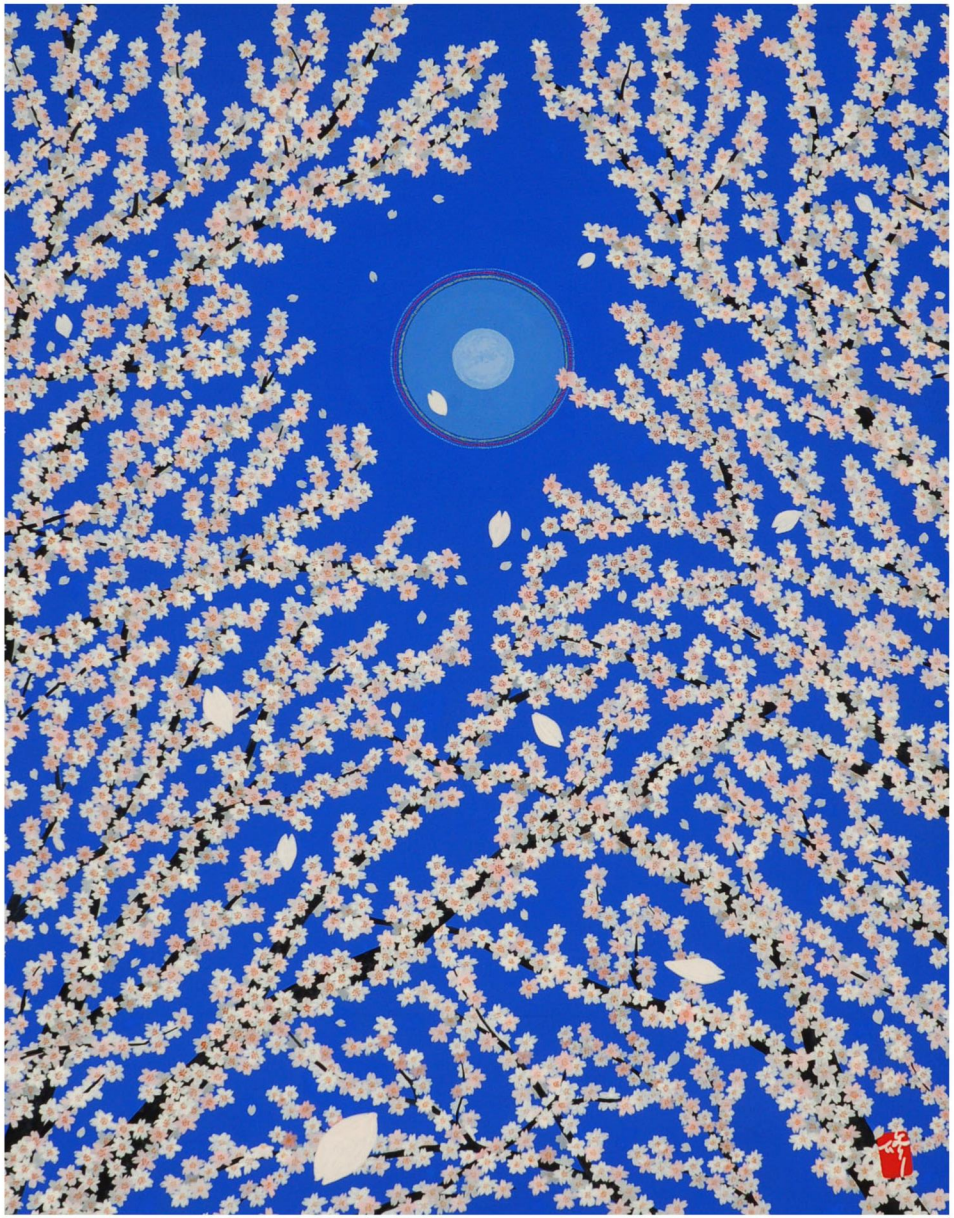
安曇野の春

春 祭 り

わが集落の祭りは　春行われる
穂高のように　立派ではないが
「御船祭り」である　賑やかな
所は　あまり　得意ではないが
息子二人が　山車に乗るという
ので出かけてみた
弟が笛を吹き　兄が舵を取って
いる

初めて見る　息子たちの勇姿で
あったが満開の桜の中で　輝く
月が　一番印象的だった

あずみ野



北アルプス

アルプス遠望

冠雪の月

庭木の柿が　その儘になっている家を
よく見かける
実は僕自身もその一人で　歳と共に甘
党になった近年　やっと干し柿を作り
出した
鳥たちの分と思い　僅かばかり残すこ
とにしている
というと聞こえは良いが　何年も不精
をしていた為　伸びきった高い枝は手
が届かないのだ
その柿が寒さと共に　日増しに赤く熟
す
冠雪の日には　白き峰々をバックに真
っ赤な柿が　事の他美しい
小鳥たちもやって来て　信州の初冬を
彩ってくれる

あずみ野

池田　大峰山

雲上の桜

花びえ

その年は桜満開の時期のドカ雪だった
これは　この地では「上雪（カミユキ）」と云う　暖かい雪ですぐ溶けるのだが　この年桜は一晩で　雪の花へと変わった
現在の地に足を止めて　３０年近くなるが　初めての体験だった
桜の花に積もった雪は　とても新鮮な美しさだった
二つの花見を　させてもらい
大いに得をした気分である

あずみ野

前常念

黎 明

心地よい疲れ

物造りにとって　開放される時間は
物が出来上った時　何かをやり終え
た時である　展覧会を終えてすぐに
山へ登った事がある
最近は便利で　生ビール等というも
のを　飲める小屋もある
5時間ほど登った後のビールは格別
である　眺めは最高だし　気づいた
時には3杯目に手を出していた
今日は先へ進むことは諦めて　テン
トを張ることにする
夜は幾つかのテントと　安曇野の夜
景が美しかった

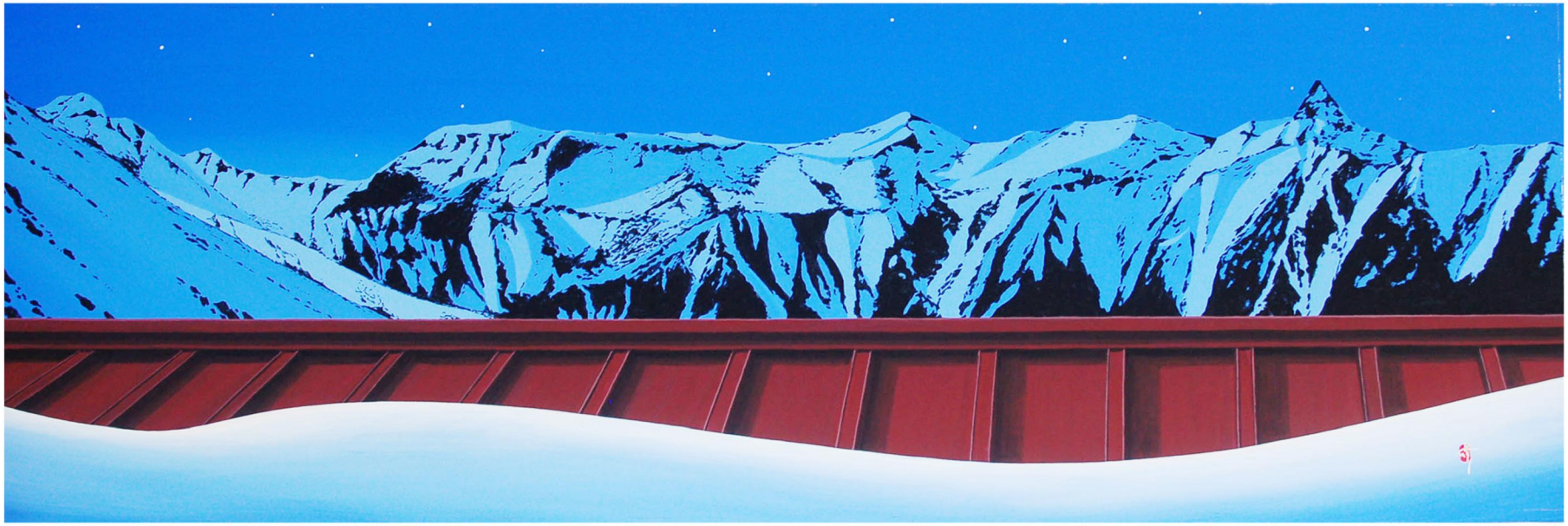
蝶ヶ岳

上高地

厳 冬

上高地

穂高連峰



常念乗越

小屋開け

山小屋の小屋開けというものを　何度か手伝ったことがある　実際には雪に埋もれた小屋を　掘り出すという雰囲気だ
スコップとスノーダンプ　あとは体力だけが勝負の世界であるが　春先の美しい山々を眺めながらかく汗はとても気持ちが良い
そして　日増しに小屋の中に光が入り　明るくなる　そんな夜の酒は　格別美味いのだが　飲んでいる間に降った雪で　翌日　またすっかり雪に　埋まっていることもある

小屋から見える風景

積雪は　二階の窓まで来ている
小屋の周りは　雪が溶けるせいか
雪の層が良くわかる　その中に
少し汚れた筋を　いくつも　見る
事ができる
これは」中国大陸から　やって来
る「黄砂」のようだ　何千ｋｍも
旅してきた砂は　雪がきれいに
パックして　幾層にも　並んでい
る
そんな事を思うと　はるばる　旅
してきた砂にも　ドラマがあるの
だなぁ！と思う

そして　そんなドラマが　絵を描
かせてくれる　要因になっている

常念小屋

栂池　天狗原

春の大渚山

湯峠からの　登りは　春の
ザラメにアイゼンが　よく
効いて　気持の良い登高で
ある
頂上では右に日本海　そし
て山稜の奥には　白馬連峰
が連なる
振りかえると　湯峠を境に
雨飾山が君座している
頂上の雪原は　下界の緑と
相まって　とても美しく
そして静かな山だった

小谷村

唐松岳

星夜雪稜

雪あかり

シベリア寒気団が　運んでくる
雪は　日本中に　色々な現象を
演出する
「豪雪地帯」などもこの寒気団
が　もたらした言葉である
生活をしている方には　本当に
大変な事と思うが　厳冬期の山
にできる　樹氷　霧氷は時とし
て　この世のものとは思えない
美しさで　私を圧倒する

全てを純白に　包んでしまう
この雪は　神々しくもある

小谷　稗田山

栂池　天狗原

春の稜線

戸隠連峰

夕 映 え

栂の森

月下山稜

雪月花

「豪雪地帯にも春のおとずれ」

こんな言葉が　似合う光景
だった　夏に訪れた事がな
いので　詳しくは判らない
が　山の上の窪みは湿地帯
なのだろうか
薄っすらと　水の気配の雪
溶けは　長い冬を終え　豊
かな春を感じさせてくれた

小谷　コルチナ

戸隠連峰

黎　明

地蔵岳

神聖なる時間

越前海岸

夜明け前

あずみ野

夜明けの出来事

松本　喜源治

早 春

作品リスト

1　トンネルを抜けると
2　月山を望む
3　残雪の滝
4　月の夜には
5　恵み
6　苗場山遠望
7　心地よい疲れ（白砂山）
8　山稜の星
9　鳥海の月
10　神聖なる時間（羊蹄山）
11　栄枯盛衰
12　家路
13　春爛漫
14　雪山巡礼
15　星の稜線
16　山上の楽園
17　富良野岳遠望
18　月出る
19　祭りへの道
20　春の宵（薬師寺）
21　春の宵（南禅寺）
22　湯煙　（藤七温泉）
23　湯煙　（浅間温泉）
24　窯焚き
25　焼成
26　夜明け前
27　晩秋のオベリスク
28
29　カトマンズの朝
30　稜線のタムセルク30
31　ボダナート寺院
32　厳冬のヒマラヤ
33　稜線のゲストハウス
34　峠に生きる
35　サンクチュアリの朝
36　湖上の星
37　ドゥードポカリの夜
38　ゲストハウスの夜
39　路地裏の神様
40　夜想曲
41　夜の寺院　（スワヤンブー）
42　旅立ちの朝
43　プモリを望む
44
45　春の兆し
46　穂高岳遠望
47　厳冬（焼岳）
48　位ケ原
49　シュプール
50　御嶽山遠望
51　乗鞍岳遠望
52　夜明けの散歩
53　秋の夜長
54　アーベントロート
55　紫陽花の夜
56　安曇野の春
57　春祭り
58　アルプス遠望
59　冠雪の月
60　雲上の桜
61　花冷え
62　黎明（前常念）
63　心地よい疲れ
64　焼岳
65　穂高連峰
66　小屋開け
67　小屋から見える風景
68　窓
69　春の大渚山
70　星夜雪稜
71　雪明かり
72　春の稜線
73　夕映え（戸隠連峰）
74　月下山稜
75　雪月花
76　黎明　（戸隠連峰）
77　神聖なる時間（地蔵岳）
78　夜明け前（越前海岸）
79　夜明けの出来事
80　早春

佐々木 修 プロフィール

1956　北海道川上郡弟子屈町に生まれる
1983　旅の途中立ち寄った信州に移り住む
1987　シルテント工房を設立　オリジナルテント
　　民族天幕の制作を開始
1998　絵画の制作を開始
1999　個展活動を開始

1999　安曇野市　「山光ホール」にて初個展
2000　ネパールへ50日間スケッチ旅行
2001　東京町田市　アートギャラリー「天空の舞い」
　　安曇野市　「山光ホール」
2003　東京　千歳船橋「けやき美術館」
　　安曇野市　「山光ホール」
　　松本「ル・コパン」にて一年間常設展
2004　札幌「石の蔵ギャラリー」
2005　ネパールへ40日間スケッチ旅行
　　東京町田市 アートギャラリー「天空の舞い」
2006　松本「蔵シック館」
2007　松本「蔵シック館]
2008　札幌「石の蔵ギャラリー」
2010　長野「ひとミュージアム」
2011　東京　熊谷守一美術館ギャラリー(二人展)

アトリエ
〒　399-8211
長野県安曇野市堀金カラス川5603－1
TEL　0263－72－4907

編集後記

佐々木　修さんの作品アルバムを手がけるのは二冊目である
一昨年　長野での個展の折にお勧めし　B5版和紙袋綴の冊子をお作りしたが　やや地味になってしまった
今回は　色彩再現の良い　マット紙を使用した
白さの優ったマット紙に印刷　概ね満足して頂けるところ迄漕ぎ着けたが　色彩の調整には　大変苦労した
全体の構成　各頁のレイアウト　文字の配置まで全て佐々木修さんの　細心の指示に従い　進めて行った
著者が側に　付きっ切りでの　共同作業であるから　気は楽なもので　指示に従っていれば　自然に一頁一頁がバランス良く整っていく
とは言っても 100ページ近い 大部の作品集であるから 大変な作業量である　朝から　ぶっ通しで夕方まで　という日が連続ではないが　20日は超える
しかし　ものを造り出す仕事は　真に楽しい
作品の撮影から　印刷　製本まで全て　手作りの本を手がけもう15冊を超える　慣れてはきたが　一作ごとに改善を重ねてきた　それでも　これで完璧という事はない
可能な限り　細心の注意を払い　丁寧に作ったつもりです
佐々木　修さんの　絵の世界に浸ってお楽しみ下さい

藤井　醇

佐々木 修 作品アルバム

発行日　第一刷　2012年10月1日
頒価　10000円
著者　佐々木　修
発行　ひとミュージアム
長野市川中島今井1098　Tel　026－283-2251
製作　アトリエ・フジイ
長野市川中島今井原7－2－1－317
Tel　026－284-8993

Edition Number　　/100